

実践報告

通信教育課程で「参画」を目指す

ー ラベルワークを活用した「国語科教育法」夏期スクーリング ー

中地 譲治¹

本稿は大学の通信教育課程において、私が担当した国語科教育法の実践報告である。今回の授業は「参画」の理念で構想され、その実現のために「ラベルワーク」の技法を用いた。また、何人もゲストを招き、教育現場の実情や、自らの教育実践についての話を聞き、それについて語り合った。最後に、受講者と担当者が協力してこの授業の評価のありかたを考えた。参画したすべての人々で、21回の授業を協同してつくり上げたことになる。参画の理念とラベルワークは、授業そのものを活性化し、受講者は教育への思いを深くすることとなった。

キーワード： 討論、言語活動、論理的思考力、論理的表現力、情報活用力

1. はじめにー「参画」的な授業のねらいとラベルワーク

大学との一貫教育校の教員が、大学の通信教育課程の夏期スクーリングにおいて、教職課程の教科教育法を担当するに際して、どのように授業を「参画」的に構成し展開したのか、その実践報告をする。進めるにあたって、林義樹の「参画」「参画する」という用語の定義を引いて、本報告での「参画」の意味を予め確かしておく。

参画とは参加者が①その場の理念・目的・目標・方法・を全員で共有しながら（共有性）、②その場の計画段階から実施・評価・伝承の段階に至るまで（累積性）、③自らその一翼をになって（責任性）、④その場に関心をもつ者すべてにチャンスを広げ（開放性）、⑤当事者・協力者の創意を結集した（創造性）知的生産行為。または、そのような、個人・集団・組織・社会の状態と定義できる。¹

「参画する」とは、その場への参加者が、当事者として関係者とその場の全体像を共有化しながら、意識的・自省的・実践的に計画段階から実施・評価・伝承段階に至るまで、自らその「場づくり」そのものにかかわり、自らその部分を担い主体的（開放的・創造的・包括的）にその

¹ 日本教育大学院大学 学校教育研究科

場に参加すること。²

「参画」は活動の理念である。この理念を授業担当者と受講者とが共有することで、知識の蓄積・整理という側面と、教員として授業を行うという側面がある教科教育法を、より活動的な授業にしていくというのが今回のねらいである。スクーリングは、面接授業を意味するだけではなく、集団生活や課外活動も含み、さらに「人格の陶冶」が目指されている³。「参画」の理念と「スクーリング」のあり方とは親しい。

また、ラベルワークは言語活動である。50字ほどの文言を記した一枚の紙片（ラベル）を取り交わすことによって、読むことや話すことなどの授業の根幹にある言語活動が活性化される。ラベルワークは特に言語活動を目的としている国語教育となじみやすい。前述の林の定義に従えば、「参画」的な国語教育の目的は次のようになるだろう。

国語教育について個人的な理解を超えて普遍的な理解にまでたどりつこうとすることによって「共有性」を高め、そのプロセスを正確に言語化して記録することによって「累積性」を高め、そこで得られた成果を行使する「責任性」を自覚し、言葉を活性化するために「開放性」を確保して外部と交通し、そして、その結果として新たに共有されうる言葉を生み出していくという「創造性」を発揮する。

以上のことの前提として、なぜ国語教育が「参画」的でなければならないかについて、次章で概観する。

2. なぜ国語教育が「参画」的でなければならないか

現行の学習指導要領は、各教科に言語活動を求め、各教科と国語科とが相互補完して育成すべき〈国語学力観〉が示されている。

「各教科の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」⁴

各教科において、その学力の要素となる思考力、判断力、表現力は、ひとえに言語活動の充実にかかっていると読み取ることができる。

学力の基盤には〈言語運用力〉がある。〈言語運用力〉は〈言語活用力〉に直結する。活用型の学力こそ、本来型の学力（現在の話題としてはPISA型学力）として捉えられている。テキストを読むという、常に事後的な文章メディアを対象化するだけの〈国語の時間〉から脱皮することが、国語科に求められている。

国語科単独で育成されるべき国語力と、他教科との連携によって育成される国語力について、〈国語の学習〉は国語科に求められ、〈国語を用いた学習〉は他教科にという傾きが生じるが、言語を運用する主体の育成という観点からとらえれば、他教科は前者を国語科は後者を絶えず意識しながら言語活動を目標化していけば、国語科と他教科との有機的な統合が図られる。

言葉の教育である国語教育は、学習そのものの前提になるメタ学力を育成する教育であると言えるだろう。そこでは、国語科の学習目標は年齢的な言葉の発達段階に応じて螺旋的に高められてはいるが、教員も生徒も、同じような授業が反復され、同じ所を周回していると感じてしまう。

言語活動の主体は人であって、人は刻々に身体的にも精神的にも変化するのだから、言語コミュニケーションは表現（expression）する人と、印象（impression）を受ける人・解釈（interpretation）する人との間で多様に変化する。そして、そのような不安定感（規範化されにくさ）は、〈読む・書く・話す/聞く〉の中で、音声言語コミュニケーションである〈話す/聞く〉ことの重視（前回の指導要領の改訂）によってさらに高まった。

〈話す〉という局面において、〈話す〉主体とそのコンテンツである〈話し〉とは最短で結ばれる（同時的である）。そこでは、言語運用の主体者意識の構築が切実に求められなければならないはずだが、それを深く強固に根気よく育成する教育内容も方法も模索されているのが現状であろう。その原因を数えれば、行政主導の公教育の停滞、資本と消費に一元化される大衆の価値観、口頭試問がなく〈読む・書く〉中心の受験体制・評価方法などがあげられるだろうが、特定の原因を見つけ出すことは困難である。そのような混乱・迷走の結果として、〈言語運用力〉の根幹である「考える力」の衰弱はもたらされた。〈読む・書く・話す/聞く〉という言語活動の前提になるのは〈考える力〉のほずであり、昨今の学力低下の問題は、〈考える力〉をどのように育むかを考えなければ解決されない。

さらに、人間が考えなくても進むような方向にメディア環境は言語運用のためのテクノロジー（デジタル通信技術）を飛躍的に（と同時に暴力的に）変化させているのだから、そのよりよい進歩のためにも防御のためにも、言語情報技術の使い手の最も基盤となる能力＝〈考える力〉の育成こそ求められる。言葉の教育における〈読む・書く・話す/聞く〉という狭義の言語活動の前提に、〈考える〉という広義の言語活動をしっかりと構築しなければならない。ここに国語科が担う国語力育成の方向性が見出せる。

国語科が標榜すべき〈言語運用力〉をどのように考えたらよいのか。近代の枠組みの中で行われる学問・教育が第一義に目指してきたのは物事を要素に細分化して認識する別化・分類の力（アナリスの力）であろう。〈考える力〉の一翼であるそれは、国語科以外でも以前から担っている。言語の運用主体の育成を担う国語科としては、「考える力」のもう一つの側面である同化・類化の力（アナロジーの力）の蘇生と、この言葉の力を生かした共同互助のあり方を提言したい。試みに、次の五点を〈国語の学力観〉として提示する。

- 現象から本質を見抜く抽象力

- 部分から全体を想起する体系力
- 試行錯誤の中から真実を発見する実験力
- 他者の傷みを感じることができる同化力
- これらの個人的営為を社会的合意にまで高める共同力

この国語学力観を前提に、「参画」的な教科教育法の授業に臨む。

3. メタ授業としての教育法—町田守弘の実践から

「参画」という語は用いないまでも、教科教育法を「参画」的に展開している例として、町田守弘の実践をあげることができる。町田はそれを「メタ授業」と名付け、次のように述べている。

国語科教育法は学生を「教育実習」へとつなぐ科目であるから、実習時に生徒が学習活動の主体になれないような一方的な授業を行うことのないように、生徒一人一人に配慮した授業を行えるような力量を身につけさせたい。そのためには、担当者自身が「国語科教育法の授業そのものを、学習者すなわち受講者の学生に対する配慮が明確になるように展開すること」⁶が必要であり、受講者が教職への関心を高めながら、今日的な問題意識をもって授業を構想し実践するために、現職教員の講話や附属校生徒との課題の応答を通じた直接交流を授業に取り込み、学生自身による模擬授業を中心に、「国語科教育法の授業そのものをテキストとした入れ子型構造の授業を目指す。」⁷以上が「メタ授業」の趣旨である。

大学の授業そのものを実習化することについて、同様の趣旨を「参画」授業という文脈で林は次のように述べていた。「教職をめざす学生であるからこそ、自らの授業を自らデザインし、実行し、評価することの意味は大きいと考えられる。(中略)大学における教育学教育の、観念的で欺瞞的な性格(とりわけ大学の授業そのものは、つまらないものでも、教師も学生も平気だという感覚)への、問題提起なのである。」⁸さらに町田の狙いは、中学高校の教室で生身の生徒と向き合う教科教員としての専門性を意識化するための実践的な工夫にある。模擬授業はもともとメタ授業として実践される。それに加えて、国語科教育法の担当者自らが行う授業自体も模擬授業にするという授業構想である。

国語科教育法の授業そのものが教室での授業であるならば、実習生が生徒へ配慮することを、まず授業担当者が学生へ配慮することによって眼前にする。(授業担当者—学生)、(教育実習生—生徒)、(教員—生徒)という反復的な対称構造が明瞭にとらえられている。「参画」的な授業が目指すのも、この構造的な一貫性を意識してそこに「参画」する者が授業を担い合うことである。

4. 回を追って一展開とねらい

今回のスクーリングは合計 21 回の授業を、7 日間、1 日に 3 時間×100 分で行った。

履修者：A さん、B さん、C さん、D さん

ワーカー：H 君

ゲスト：林義樹さん、芹川青甫さん、関口益友さん、長谷川雄亮さん

生徒役エキストラ：T 君、K 君

教員も含め総勢 12 名が今回の参画授業の学びの仲間である。総数 268 枚のラベルを整理しながら、時系列的に授業をたどって、本章では 21 回行われた授業 (1) ～ (21) の展開とねらいを主な回を中心に報告したい。

(1) 5 分間スピーチ：ラベルとラベルトーク

「参画」意識を確かにするためには「参画」者の人格性の相互承認が必要である。そのために、初回のラベルワークで、まず自らの名前を書き⁹、自己紹介の感想を書いて当人に手渡す。

話（スピーチ）は音声言語であり、音声言語は時間言語である。時間内に相手に伝えたいことを過不足なく伝える訓練は、国語教員にとって最も必要な訓練であると同時に、時間のシェアは「参画」者が相互に存在性を認め合うための基本である。

ラベル資料 1 A さんの自己紹介への感想ラベルと自己紹介を行った本人のラベル

<p>B さん (A さんへ) : 言語教育に対する熱意 が力強く伝わってきました。</p>	<p>C さん (本人) : イメージ ではもっとスムーズに話せ るはずだったのですが、な かなか難しいですね。</p>	<p>中地 (A さんへ) : 「ことば」の 教育をともに考えていきましょう 。英語教育の現場の知恵から無味 乾燥な授業にならない工夫を教え てください。</p>
<p>C さん (A さんへ) : 英語 教育の経験、日英を対照さ せた「ことば」の教育の実 際など、興味深いお話がた くさんありました。</p>	<p>D さん (本人) : 若干抽象 的な形の自己紹介であっ たので、受け入れてもらえ たか不安。もう少し要点を まとめる努力をしたい。</p>	
<p>D さん (A さんへ) : 美し く順序立てられていて分か りやすく、自分のスタンス についても説得力のある自 己紹介だと思いました。</p>		

(2) 「なぜ国語を学ぶのか」を読む：音読の大切さ・発問の特殊性

「なぜ国語を学ぶのか」と題された A と B の二つの文章を読むことを通して、国語の授業で文章を読むこと（生徒に文章を読ませること）と、教員の発問がもつ特殊な問いの構造について考察する。文章 A は、問いそのものを生み出す力を国語の学習に期待する。文章 B は、国語は人生という言葉の累積を支援するのだと主張する。

A 「なぜ国語を学ぶのか」とぴったりと通じる疑問に、かつてサルトルが同時代の文学者に突きつけた「飢えた子供に文学は有効か」という、安易な答えを拒絶する言葉がある。難問ではあるが、その問いを生む力、問いに立ち向かう力が、言葉の力、つまり国語の力ではなからうか。その力を信じて言葉によって誠実に問い続けるために、国語を学ぶのだ。¹⁰

B 「なぜ国語を学ぶのか」、人生が言葉による活動の総和であるのなら、よりよい人生の手助けのためだ。自らの手助けとなる活動の実質は、試行錯誤の結果としてもたらされる。試行錯誤は、自己決定と自己責任とともに猶予された思春期であるからこそできる。その未来への活動は言葉によってなされ、その言葉の総和が人生なのだ。¹¹

何を知りたいかは個人によって多様であるが、なぜ知りたいかは個人を超えた問いになる。「何を学ぶか→どのように学ぶか→なぜ学ぶか」という問いは、「何を」（知識）、「どのように」（認識）、「なぜ」（意識）と深められている。ここには教員が生徒に発する発問と同じく、「参画」意識が深まれば深まるほど問いに対する答えは単純ではなくなるという構造がある。

ラベル資料 2 「なぜ国語を学ぶのか」感想ラベル

Aさん（感想）：国語教育の難しさに改めて気づかされた思いがします。勉強することがたくさんあると思いました。

Bさん（感想）：配布物を読んだり、指導案を作成したりする必要があるのですが、かなり時間が掛かりそうだと感じました。

Cさん（感想）：音読の前回の指示など、非常に具体的に参考になるものでした。教案づくりがんばりたいと思います。

Dさん（感想）：あっという間に時間が過ぎていきました。この一週間、学習を通して成長できたと思います。

（3）模擬授業の教材選択：ペアトーク

3日目から始まる授業演習の教材選びを二人一組のペアになって対話的に行った。今後の指導案の作成も、常に学生同士で対話的に行う。

ペアを組むことは少人数でも多様性をつくりだすために効果がある。4人の少数の受講者がペアを組むと、機会としては4回を超える機会を生み出す。A-B、A-C、A-D、B-C、B-D、C-Dというペアでは、4人が6ペアになると同時に、AさんはBさん、Cさん、Dさんとペアになるのだから、一人が3通りの機会を得られる。それを単純合計すれば12になる。A-Bの組み合わせもB-Aの組み合わせも数学的には同じと見なされるが、Aさんから見たBさんとのペアA-Bと、Bさんから見たAさんとのペアB-Aとは別のペアとして考える。

（4）「『国語科教育法』をどのように扱うか」を読む：「メタ授業」としての教育法

前述の町田の実践について考える。町田の授業実践者としての教員の“学ぶ姿”を学生が学ぶという構造は、学生の意識が教員の意識に意図せずに重なり合い、人格的な感化をも可能にするという仕掛けが、巧みに施されている。

ラベル資料 3 町田論文を読んで

Bさん（町田論文）：授業スタイルを学ぶ機会を得ることは、今すぐではなく将来のためだ。	Cさん（町田論文）：「多様な生徒の考えを引き出し、それをまとめていく力」を、この授業でつけていきたいと思いました。	Dさん（町田論文）：主体的な参加による知識や思考への共有を積極的に行い、授業を深くよいものにしていきたい。	H君（町田論文）：実際に教育法を受けて、授業実践の形式を学べた。形式に依拠することで内容もゆたかにできる。
			中地（町田論文）：メタ授業とはとても参画的であるという点に我が意を得た。

（5）授業形態の工夫：「参画」という視点（ゲスト：林義樹さん）

【展開とねらい】林義樹さんをゲストに迎え、講義の後に対話的な交流を行った。ゲストは「参画」の定義「④その場に関心をもつ者すべてにチャンスを広げ（開放性）」にかかわり、ともすれば自閉的になりがちな教室内集団を活性化し、新たな対話と交流をつくり出す契機となる。

ラベル資料 4 林さんの話を聞いて

Aさん（林先生感想）：参画での参与段階の重要性、人間関係の組織化、他者の目で授業を徹底的に見直すなど、とても勉強になりました。	Bさん（林先生感想）：文章→図式→図解→映像という流れは、映画制作の流れにも似ていると感じました。	Cさん（林先生感想）：生徒自身が学習計画書を書けるようにというのは、とても刺激的で目指したい理想だと思いました。	H君（林先生感想）：参画とは共同体の場づくり、学びの形式の明確化、目標と行動の共有ではないかと思えます。
			中地（林先生感想）：参画は、現代社会が失っている無償性に気づかせてくれる理念です。

（6）国語教員の言語運用力：ラジオ番組を聴いて考える

国語教員にとっての言葉以前に、教員にとっての言葉の問題が存在する。例えば、教員が生徒に対して用いる一人称に「先生」という言い方は是か非か。また、今日的な問題に、教員と生徒とが「参画」的な関係であるのなら決して起きることのない、ハラスメントの問題がある。これについて、ラジオ番組を聞いて考える。「教え子にやっていいこと悪いこと」¹²というテーマでの宮台真司の問題提起は、次のような要旨であった。

教え子の学生に暴言を吐いたとして 54 歳の男性教員が懲戒処分された。「チビなどと言ったのは親しみをこめたつもりだ」と弁解しているが、それは現代においては通用しない。「ちゃん」付けや、「かわいいね」と言われることがいやでたまらない女子も多いのだ。また、先生とは何者であるのかという解釈も昔と今では全く違う。現代は個人情報も共有化されなくなり、昔のつもりで振る舞うことはできないのである。もっと敏感になれといっても、また、些細なシグナルを見逃さないための訓練にも限界があろう。相手がノーと言わないからイエスだと思ってはならないということを、子どもの時から教えずにはならないのだ。人の気持ちを察することができない日本

人は、グループワークの能力が先進諸国の中で著しく劣っている。それが学力低下の大きな原因であるという分析もある。他者の視座がよく分からないので自分の視座で押し通してしまうと、結局人間関係が破綻してしまうのである。とくに教員のような特権的な立場の人間に、なかなか人は忠告しない。せめてもの策として、誰かに頼んで、自分の言動や振る舞いが他者にどのように解釈されているかを、機会あるごとにモニターしてもらおうよりないのである。

ラベル資料 5 宮台発言への感想ラベルと授業要点ラベル

宮台感想	授業要点
<p>Aさん（宮台感想）：他者のフレーム、他者の視座に立つことの重要性和グループワークの必要性について勉強になりました。</p> <p>Cさん（宮台感想）：「何を話すか」の前に、相手がどんな状態にあるか、どんなフレームをもっているかを考えることが大切であると思いました。</p> <p>中地（宮台感想）：自分をモニターできる他者が必要のように、自分の授業をモニターする他者の存在が欠かせない。特に国語の授業は。</p>	<p>Aさん（授業要点）：主体的言語活動である言語運用力、他教科との有機的連携、創造的試行錯誤など、国語の学力観は大きいと思いました。</p> <p>日さん（授業要点）：世の中が変化していく中で、話す・聞く・考える力が求められている。</p> <p>Cさん（授業要点）：塾でもメタ言語能力を育成するような授業は一定程度可能であるし、またこれから目指す必要があると考えました。</p> <p>Dさん（授業要点）：わかりにくいことを排除せず、考える主体を育成すると同時に、自分自身も主体として向かえる環境作りをした。</p> <p>H君（授業要点）：第一に「考える」という言語行為があつて初めて「話す・聞く・書く・読む」が成立すると考えました。また、同化力・類推力に関しては、他者は自分だと考えられることが大切だと思いました。</p>

(7)・(8) 現代文教材の演習—随想：武満徹「暗い河の流れに」

最初の教材である武満徹の「暗い河の流れに」は、〈他者〉との出会いを封殺する〈国家〉への根源的な批判をテーマにした随想である。授業演習の教材としてはやりにくいと思われるが、知識を問う発問を行いながら、国家とは何かという深い発問に近づけていく工夫と力量が問われる。そのような狙いを実現する30分を生かし切る指導案は、深い洞察にたどりつくための設計図である。

「参画」を目指す授業を可能にするためには、生徒と教員との、また生徒同士の対話と交流によって、単純には語り得ないものに突き当たらせる（教員自らも突き当たる）ことが求められる。授業演習で初めてラベルを書いた。

ラベル資料 6 授業演習初回のラベル

<p>モニターラベル</p> <p>Bさん(Aさんへ) : 細かいところがよく分らずに、把握しにくかった。</p> <p>Dさん(Aさんへ) : 柔らかいので、読むのが楽です。</p> <p>Dさん(Bさんへ) : ああ、そうですね。私も最初は、そのように思っていました。</p>	<p>問題ラベル</p> <p>Cさん(本意) : 図と対応が、答えに納得がいかない。</p> <p>Dさん(本人) : さあ、もう一度説明してもらえませんか。</p>	<p>担当者ラベル</p> <p>中地(中) : 「何を言っているのか」という点について、もう少し詳しく説明しよう。</p> <p>中地(中) : 「何を言っているのか」という点について、もう少し詳しく説明しよう。</p> <p>中地(中) : 「何を言っているのか」という点について、もう少し詳しく説明しよう。</p>
---	---	---

(9)・(10) 古文教材の演習—歌物語：「筒井筒」伊勢物語

古文の入門期の教材として、まず筒井筒の前半部分を、次には後段を含めて全体を取り上げる。伊勢物語のような初期の物語は、単純な構造であるがゆえに、豊かな物語性を読み取ることができる。単純さが豊かさであると実感させるための授業を構想する。

ラベル資料 7 古文の授業へのラベル

<p>Aさん</p> <p>Bさん(Aさんへ) : クイズによって今の違いが明確になり、授業に引き込まれた。訳について、口頭でサラッとして、メモを取らせてほしい。</p> <p>H君(Aさんへ) : 最後の考察に至るまでの基礎の過程、また、最後のグループ討論とその主題など、わかりやすい授業構成でした。</p>	<p>Bさん</p> <p>H君(Bさんへ) : ペアワークを取り入れた古文は新鮮でした。語尾が弱く自信がなさそうな印象を受けたので、説得力に欠けるかもかもしれません。</p> <p>中地(Bさんへ) : 生徒はどこに連れて行かれるのか不安になるのは、本文の読みたどとどしきも主要因。</p>	<p>Cさん</p> <p>中地(Cさんへ) : ペアワーク・グループ討論によって仲たが言語活動が行われた結果、テキストがオープンになって、皆に共有されていた。</p> <p>Dさん(Cさんへ) : テンポがいい授業でした。グループワーク・ペアワークは授業に効果的だと思います。見習いたるところがたくさんありました。</p>	<p>Dさん</p> <p>中地(Dさんへ) : 随所に工夫があった。指導目標はもっとミニマムなものでいい。そうすれば30分でも狙いは実現しただろう。</p> <p>H君(Dさんへ) : 考えさせるペアワーク発表の反復のテンポのよい授業。知識の交流が個人・グループ全体と拡がることでさらに有効な学習になるだろう。</p>
--	---	---	---

(16) 「国語」と「日本語」：フランス語教育と国語教育 (ゲスト：芹川青甫さん)

国語科教育法の先学として、また、現職の教員として高等学校でフランス語を教えている芹川さんをゲストとして招き、日本人ができないフランス語の発音と、フランス人ができない日本語の発音という題材で、言語の音声的な問題と、フランスに輸入された日本のマンガがどのような表記法によって読まれているかという言語の書記的な問題を考えた。外国語教育と国語教育を複眼的にとらえたとき、どのような風景が見えてくるのかに受講者は興味津々で、とても深い話題での交流

となった。

異文化理解の問題は「国語」の自明性を疑わせると同時に、その疑念が逆に「国語」を意識化させる。その相補的な運動を、「吹き出し」の読み方の注意書きが示していた。

また、芹川さんの次のような考え方が、受講者の心をとらえた。「ある絵画展に行ったとき、よく見ると画に筆の跡がくつきりと残っているのに気付いて、えも言われぬ衝撃を受けた。その画は、数百年も前に、そこに一人の生きた画家が絵筆をとって、手ずから色を描き加えたという極めて当然の事実、いまさらながら思い当たり、感傷に似た不思議な気分を味わった。それからというもの、私は表現芸術のなかに人間を、それも生身の人間をどこまで感じとれるだろうかということをししばしば考えるようになった。」

ラベル資料 8 芹川さんへのラベル

Aさん（芹川先生）：マンガの話はとて面白かった。フランス語を知ること、知る日本語の特徴に気づかされました。

Dさん（芹川先生）：身体で文学や美術に立ち向かう姿勢にはっとさせられました。国語教育に求められていることを美しく捉えています。

Cさん（芹川先生）：書き言葉と話し言葉、ラテン語に対するフランス語と漢語に対する日本語など、期せずして自分の研究に直結するお話を伺えました。

H君（芹川先生）：言葉にしても絵画にしても音楽にしても、それがある人間から発せられたその瞬間を想像することが大切だと思います。

（17）国語科における評価：生徒とつくる評価（ゲスト：関口益友さん）

神奈川県公立中学で国語を担当し、参画教育の仲間である関口さんをゲストとして招き交流した。「朗読ってなんだろう？」という問いから出発して、生徒と共に朗読の評価基準をつかって、朗読を相互評価する授業、説明文の図解化で飛躍的に読むスキルがアップする学習指導（資料1）、ポストイットを用いた「走れメロス」の初読感想のラベル新聞など、関口さんの教室から授業の成果（写真1）が直接運ばれた。

写真 1 届けられた成果



ラベル資料 9 関口さんへのラベル

<p>Aさん（関口先生）：生徒とつくる評価、お互いに評価し合うことのプロセスを通して見えてくる目的や意味にたくさんの効果があると思いました。</p>	<p>Bさん（関口先生）：ポートフォリオを作るにより、生徒自身が主体的に国語はもちろん、その他の教科の学習力が高まるのがすごいと感じました。</p>	<p>Cさん（関口先生）：評価「される」のではなく評価を「つくる」ことによつて、生徒が主体的に参画するという発想が新鮮でした。</p>	<p>Dさん（関口先生）：生徒の作った図解のできの良さに驚きました。生徒よつて教師が気づかされる、それが生きた教室ですね。</p>
--	--	---	---

資料 1 説明文を図解する

平成19年度 市中学校教育課程研究会提案資料

中学校 国語部会

テーマ
「主体的な学びの中で、読解力を高める指導方法の工夫」
～説明文を一枚の図で表す『図解』を通した新しい授業づくり～

小さな労働者 フォードマン

大きな労働者

雄弁に真実を語る
大きな力がある

所属校 中学校

氏名 関口 益友

(18) 国語教員を生きる：日々と実践（ゲスト：長谷川雄亮さん）

国語科教育法の先学として、関口さんがベテランなら、若手の代表として、教員3年目を迎えた長谷川さんをゲストとして招いた。国語科教育法を履修したいいきさつ、就職後の教員としての生活、国語教員として行う教材研究や授業実践の楽しさと苦労などが語られた。精巧に、丁寧に作られた教材や、綿密な「自己点検評価表」（資料2）などが紹介された。

資料2 自己点検評価表

平成21年度 中・高等学校 自己点検評価

(NO. 2)

科目名	国語	学級	中学 第1学年	指導者名	A～F 組 A・C・E 長谷川 雄亮 B・D・F
-----	----	----	------------	------	--------------------------------

学期	指導項目(学習活動・教材)	領域	時間	指導目標	自己点検評価
一学期中間まで	授業開き		1	授業の受け方について理解させる。	授業を受ける心構えを学ばせることができた。
	「みずゞコスモス」★ ——わが内なる宇宙 【詩】・【批評】	読む 書く	5	金子みすゞの世界観を味わう。 定型詩を作り、リズム感を会得する。	詩の解釈よりも解説文の読解に力点をおいて指導した。定型詩作りには挿絵も加え、積極的に取り組むことができた。
	桑原茂夫 「ちょっと立ち止まって」 【説明】	読む 書く	3	説明文の「読み方」の基本に気づかせる。 身の周りの物の見方を変えることによって新たなことに気づかせる。	「問い」と「答え」の連鎖という、説明文の構造を理解し、メリハリをつけて文章を読む読み方を知ることができた。
	わかりやすく説明しよう 発見したことを伝えよう	書く 話す 聞く	3	論理的に「書くこと」、「話すこと・聞くこと」の基礎・基本を身につけさせる。	「ちょっと立ち止まって」の延長として、物の見方を変えてみるという作文を書くことができた。
	立原えりか★ 「アイスキャンデー売り」【物語】	読む	4	他者との会話を通した主人公の心情変化を捉える。	事実を軸とした心情の読み取り作業を反復的に行った。
	言語①「話し言葉と書き言葉」 漢字①「漢字の組み立てと部首」	言語	1	話し言葉と書き言葉の違いを理解させる。 漢字の組み立てと部首について理解させる。	話し言葉と書き言葉の違いを理解できた。 漢字の組み立てと部首について理解できた。補助的に高校の学習内容を含むプリントを学習した。
	文法事項1◆	言語	1	文章・段落・文・文節・単語	日本語の最小単位を理解できた。

ラベル資料10 長谷川さんへのラベル

Aさん（長谷川先生）：丁寧な学級通信、ご苦勞の多い生活指導と、中学・高校のいろいろなお話が参考になりました。ありがとうございました。

Bさん（長谷川先生）：最初に評価のポイントを示すことによって、難しくてもできるという気持ちをひき出すことができるのだと思いました。

Cさん（長谷川先生）：非常に入念なプリントづくりに驚嘆しました。こういうところで生徒の信用が得られていくと思いました。

H君（長谷川先生）：生徒指導や保護者との関係、教室内での様々な問題など、授業以外での大変さを少しは理解することができました。これからも頑張ってください。

中地（長谷川先生）：教材と真正面から向き合って研究されている姿が目には浮かびます。その姿があってこそ、生徒はついてきてくれます。

(20) 総まとめ：この授業の評価をつくる

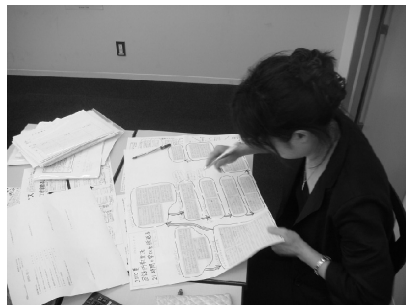
「参画」的な授業の目指す評価の問題について考える。ゲストの関口さんの実践は、本時の伏線でもあった。この国語科教育法の評価を受講者と授業担当者とでつくり上げることを目標にした。お互いにポストイットに評価項目になることをいくつも書き、それをグループ分けして、またそこから抽出して、そして、次のような評価シート（資料 3）をつくり上げた。

資料 3 国語科教科法 評価シート

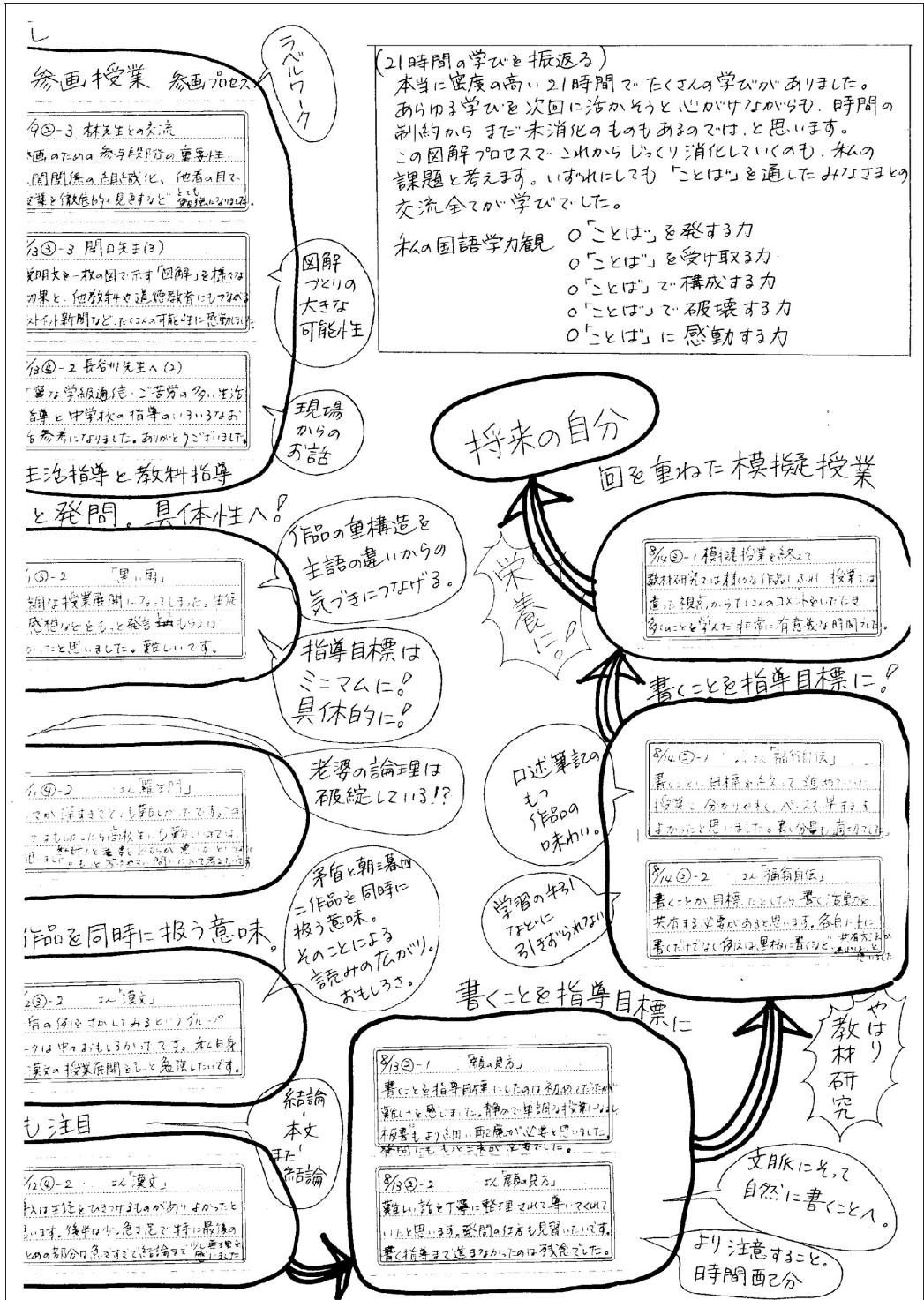
学籍番号 _____	氏名 _____	大学 通信教育 夏期スクーリング II期 2010年8月7日～14日		
国語科教育法 評価シート				
①評価の観点と評価				
1. 教育実践や教員の仕事に積極的な関心を示したか	A	B	C	D
2. 国語科の教科内容について十分に理解していたか	A	B	C	D
3. 適切な授業の展開と自己改善に努めたか	A	B	C	D
4. 模擬授業の授業目標が適切であったか	A	B	C	D
5. 他の学生や自分に対して適切な評価ができていたか	A	B	C	D
6. 以上を総合した全体評価	A	B	C	D

(21) 教場レポート：「学びのプロセス図解」をつくる

最後にラベルワークの仕上げとして、「学びのプロセス図解」を作成した（写真 2・3 は作成の様子）。それは、自己の学びをたどり直し、一望の下に図解して把握する試みである。その一部（資料 5）を紹介する。

写真 2・3 学びのプロセス図解をつくる

資料4 学びのプロセス図解(部分)



ラベル資料 11 授業演習を終えて

Aさん（授業演習）：教材研究では様々な作品に触れて、授業では違った視点からたくさんコメントをいただき、多くのことを学んだ非常に有意義な時間でした。	Bさん（授業演習）：広く教材を扱い、5回の授業実習を行い、得をした気分です。場にだいが慣れることが出来ました。	Cさん（授業実習）：生徒が自分自身から授業に参画し、自分の言葉を作り上げていく活動の一端が見えた気がしました。	Dさん（授業演習）：自分の担当だけでなく、他の方々の内容・形式・態度などすべてが勉強になり刺激になりました。ここで共有されたものは、間違いなく私の財産です。
---	---	---	--

今回のスクーリングにアシスタントとして「参画」したH君は次のような感想を寄せた。

受講生の授業は日々進歩し、より参画的になっていった。また、ある模擬授業には私の他にもう一人K君が参画した。国語科教育法の受講生ではない「純粋生徒役」の参画は、より実際の授業に近づくことができるため、模擬授業を実践する受講生にとって大変有意義なものであった。実際に受講生もそう言っていた。模擬授業に参画して私が感じたことを以下にまとめる。音読、ペアトーク、意見の発表など生徒の言語活動を活発にすることで生徒はより授業に参画できる。最初に授業目標を提示することで生徒は理解しやすくなる。その授業の指導目標を明確に具体的に定めることで授業内容と展開も明確になる。

ゲストの方々のお話を伺って考えたことがある。「参画」とは共同体の場作り、学びの形式の明確化、目標と行動の共有ではないかということである。それは教育だけでなく全ての社会と人間関係にも通じるものである。人と人との関係性をどのように組織化するかということが「参画」の核にある問いではないかと考えた。また、評価基準を生徒とともに作るというお話がとても斬新に感じられた。教員が一方的に生徒を評価するのではなく、評価の基準を生徒と共に作り、それを共有することで、生徒はより意欲的に授業に参画できると思ったからである。

(H)

また、受講生の一人は評価シートの記述部分で、今回のスクーリング全体を振り返り、次のように述べた。

盛んに言語活動が行われ、それゆえ講義では得られないような体験的な知を獲得できたように思います。ラベルで書いたこととも重なりますが、他の生徒・先生・アシスタント他、そのすべてがことばを発し、ことばを共有する空間は、今までにない刺激に満ちていて、一日は短く、しかしまとめてみると長い一週間でした。少人数ゆえの密な関係というだけでは語りきれない充足感に満たされている気分です。正直、模擬授業も多く、負担の多い内容でした。しかし、それを血肉にできる「言語活動」によって、そこにあった思考の流れが、今、私の身体を再構築したような気がします。

5. 考察—「参画」的な国語科教育法

ラベルを用いることで、例えば第1回目の授業で行ったように、〈5分間の自己紹介スピーチ〉という言語活動が、書くこと、読むこと、話すこと、聞くこと、交流することという全面的な言語活動に展開していく（ラベル資料5）。そこには言語活動の主体としての人間存在がはっきりと立ち現れ、お互いが一人格として相互承認される。Aさん自身の緊張や不安が、授業における価値ある経験として認められ共有される。言葉を運ぶツールであるラベルを活用すると、授業者がことさらに意図しなくても、ラベルによって言葉の伝達性が高められ、言語活動は多様に自然に展開していく。このような「参画」的な環境が、教員の発問の質を高める。

発問は、普通、教員が答えを知っているが生徒に問うという場合を想定しているが、そう単純ではない（ラベル資料6）。まず知識レベルでは問いと答えの関係は単純であり、答えを知っている教員が知らない生徒に問う。答えを単純に求めない問いかけであっても、対話によって教員の考えと生徒の考えとを接近させることはできる。しかし、教員は自分でもわからないことを生徒に問いかけることもある。人生的な究極の問いを生徒と共有するための発問もあり得る。ラベルワークがそのような発問を可能にする環境を準備する具体的で実践的な方法としてとらえられる。

このような教員としての実践知にふれたラベルは二つの方向を示している（ラベル資料6）。一つは、教壇に立つ教員の気づくことのできない自分の表情や視線、声量・声質や身のこなしなどの、モニター的情報に触れたラベル、一つは、発問の難しさや、内容的な理解をどのように生徒と共有すればよいかという問題に触れたラベルである。前者は他者の認識のフレームを認識するというメタ認識であり（ラベル資料5）、それは自分では気づくことの困難な、他者との共同性の中、つまり「参画」的な環境において自覚する意識である。

後者については、例えば古文の授業を文法的な解釈や現代語訳という作業ではなく、言葉を活性化するために、生徒が十分にペアトークやグループ討論などの言語活動によって成り立たせることが目指される。そこに「参画」的な環境の有効性が再認識されることになる（ラベル資料7）。

『伊勢物語』「筒井筒」の段では、高安に住む鄙びた田舎の女の生活臭の描写が、誰も見ていないにもかかわらず丁寧に化粧をして男を思いやる大和の女に対比されて、この章段全体の構造がはっきりと骨組みとして表れる。読む者は、いわゆる〈みやび〉という美意識をどのように描いているかにひきこまれていくが、教材として読んでいく際にそのような美意識に触れていく読みは、共感の場が確保されない限りは実現しない。共感のないところに美は生まれない。「参画」的な授業は共感の場をつくり出す（ラベル資料8）。

教科教育法は、教育実習の前段階に位置づけられ、学校現場で初めて実習を行うに際しての基本的な技能と心構えを身につけること、これが一般的に教科教育法の目的である。しかし、教科教育法の方法に関しては確固とした定式はない。

さらに、将来は教員になることを前提にすれば、それを〈実〉とし、その〈実習〉が教育実習で

あり、さらにその前提となる教科教育法は〈〈実習〉習〉と解すれば、その〈実〉という核は教科教育法においても核である。教員であるものと教員になるものとの同胞意識が「参画」意識をもつ、つまり教員として共にある場を自省的に担い合うことになる¹³。したがって、短期のスクーリング期間ではあるが、教科教育法の科目担当者と受講者とは「参画」意識の共有を目指した（ラベル資料 11）。

〈教員になる〉という簡明な言葉が暗示するのは、〈教員になるための知識を得る→教員になるための指導を受ける→教員として生きる〉というプロセスである¹⁴。一人でもなし得た行為が限界を超え、人から学ばねばならなくなり、その学びの結果として、その場をにないあう人々と共に生きていく。

教員ではない人間が教員になるということは、人間の変容である。〈教員として生きる〉という、いわば生の決断に一人の人間が赴こうとする機会に、教科教育法は寄与している。また一方で、教員になるという動機が希薄な学生、たとえば教員免許も資格の一つとして取得しておきたいという程度の学生に、教員になりたいと本気で思わせる授業でありたい。そのためには、〈生きる〉ために〈教員になる〉という意識を湧き起こさせることが求められる。「参画」は生きるための場づくりであるので、教科教育法は「参画」に方向性を持つ（ラベル資料 7）。

したがって、ゲストを招くことによる効果は大きい。国語科教育法の「参画」授業がとらえたいのは、共に国語の教員として生きるという意識である。教育法は技術的なメソッドの講義であると考えていた受講生の一人は、ゲストとのラベルトークの交流で、その思いがよい意味で裏切られたと話した。ベテランの教員でも年齢的にも近い教員でも、その生の経験は、どんなに苦労があっても国語教員としてがんばっていくことへの共感を引き出した（ラベル資料 10）。同僚意識や同胞意識は、なにも同じ職場において求められる意識ではなく、それが本物であるのなら職場を超えていく。

そのような意識は授業のあり方により効果を与える。読めるものしか読まない、話せることしか話さない、書けることしか書かない、話せることしか話さないという日常態の変容を「参画」的な授業を目指す。読めないものを読もうとし、書けないことを書こうとし、話せないことを話そうとするためである。したがって、逡巡に対する決断が、沈黙を破る発話が、真白い紙に書き始める冒険が授業で展開する。〈読む、書く、話す、聞く〉をパーシャルに組み立て、気がつくと高次の言語活動としてインテグレートされる。「参画」的な環境は、教員にも生徒にも、わくわくするような未知への誘惑をもたらす。

「参画」的な授業の意識は評価の問題にも及ぶ。教員が生徒を評価するという自明性が、生徒が教員を評価するという事態によって相対化されている現実がある。人事考課的な視点で導入される場合もあり、教員の自己教育意識を高める場合もある。しかし、教員と生徒とが協同的に評価をつくり出すという「参画」的な試みは、結局は生徒の意欲も高め、教員も様々な工夫をするなかで、教員としての力量も高まる（ラベル資料 8）。教員から生徒への一方向的な評価の視線を、教員と

生徒、そして生徒同士の多方向に交錯させる工夫によって、授業は豊かになる。その果実としての生徒作品と、その実践をまとめた資料とが今回のように「参画」の場に運ばれる(ラベル資料 9)。それを受け取った者は、いつか同じ価値を持つなにかを返そうという思いを「学び」の意欲として湧き起こす。

「参画」的な国語科教育法の要諦は、受講生最終回の授業でまとめた〈五つの国語学力観〉に尽くされている。このような命の通った国語観に思い至り、国語教員として子どもたちと接する受講生の将来像を、今安堵して思い浮かべた。二人のそれを最後に引用し、報告を終える。

五つの国語学力観

- 言語活動を起こさせる力
- テキストを対象化するのではなく、テキストによって、自己を対象化する力
- 文学にとどまらず、芸術・自然も愛する力
- それ以上に人を愛する力
- 上4つを他者と共有する力

-
- ことばを通して他の人と連帯し、わかりあうための力
 - 文には明示されていない感性的・感受的な情報も読み取る力
 - 文章の構造やそのテキストが書かれた経緯をメタ的に認知する力
 - テキストを自分のこととつきあわせ、自分の生活とのかかわりで、ことばと向き合えるようにする力
 - 他の人と連帯し、わかりあうためのことばをつくりだす力

引用文献

林義樹 (2010) 「新訂 キーワードで拓く新しい特別活動」日本特別活動学会監修 東洋館出版社

林義樹 (2002) 「参画教育と参画理論」学文社

慶應義塾大学通信教育課程 http://www.tsushin.keio.ac.jp/students/scl_gakushu/index.shtml

文部科学省「中学校学習指導要領」

町田守弘 (2008) 「『国語科教育法』をどのように扱うか—メタ授業としての要素を生かすために」

早稲田大学教育学部 学術研究(国語・国文学編)第56号 2008.2

神田邦彦 (2006) 「中学総合的研究国語」旺文社

村上慎一 (2001) 「なぜ国語を学ぶのか」岩波ジュニア新書 岩波書店

注

- 1 「新訂 キーワードで拓く新しい特別活動」日本特別活動学会監修 東洋館出版社 2010
- 2 林義樹「参画教育と参画理論」学文社 2002（以下、林2002） p.236
- 3 「スクーリングは、通信による自宅学習では教授することが困難な実験や実技を伴う科目、その他面接授業が必要とされる科目の講義、さらには学園内での集団生活や課外活動を通じての人格の陶冶等のために極めて大切なものです。」http://www.tsushin.keio.ac.jp/students/scl_gakushu/index.shtml
- 4 「中学校学習指導要領 第1章 総則」の「第4 指導計画の作成に当たって配慮すべき事項 2—（1）」
- 5 「『国語科教育法』をどのように扱うか—メタ授業としての要素を生かすために」早稲田大学教育学部 学術研究（国語・国文学編）第56号 2008.2（以下、町田2008）
- 6 町田2008 p.3
- 7 町田2008 p.4
- 8 林2002 p.9
- 9 「記名は、「ラベルを一人の人格的な存在だと考えて取り扱う」という、参画型ラベルワークの精神を技術的に表現する原点である。」林2002 p.273
- 10 神田邦彦「中学総合的研究国語」旺文社 2006 p.2
- 11 村上慎一「なぜ国語を学ぶのか」岩波ジュニア新書 2001 p.184
- 12 TBS ラジオ「荒川強啓ダイキャッチ」2010年7月30日放送分
- 13 「参画的授業を構成するコンセプトとして、「独自性、仲間性、現場性、人生性、参画性、作品性」の6つがある。」林2002 p.p.68-70
- 14 「参画モードの学びのめざすものは、当該テーマに対する「主体者、当事者としての意識」の覚醒である。」林2002 p.268

Practice-based Report

Increasing student participation in an intensive summer school course for student teachers of Japanese

Nakachi, Joji

This paper is a result of my experiences teaching an intensive summer school for student teachers of Japanese. I made student participation in curriculum design and grading my organizing principle. To increase participation and involvement I adapted “Label work” activities and invited guest speakers from various educational situations to address the class. The guest lectures formed the basis for classroom discussions. Finally, the students and I negotiated assessment and grading criteria for the class. The whole class was involved in determining class content and assessment. The teacher-student collaboration and “Label work” activities increased student motivation, classroom participation and fostered greater interest in education.

Keywords: student teachers of Japanese, intensive summer school course, collaboration, Label work
